

南信 中信

# 始発駅 信州よ

駒ヶ根市出身

水産学博士

中村 智幸さん (47)

「ルビー色の小さな点と小判形の模様が、真っ白い腹にいくつも浮かんでいた。23・5歳のアマゴでした」。当時、生まれ育った駒ヶ根市の赤穂小5年生だった。春休み中の3月30日、中央アルプスに源を発して天竜川に注ぐ市内の川で初めて釣った魚の記憶は色あせない。

栃木県日光市の独立行政法人水産総合研究センター生態系保全研究室の主任研究員。アマゴやイワナの生態や繁殖を研究し、川を禁漁区域や養殖魚を放流する区域、子どもの釣り場区域などに分けて計画的に利用する「ゾーニング」管理を提唱している。

「守る・増やす渓流魚」（農文協）、「イワナをもっと増や



水産総合研究センター「さかなと森の観察園」の観賞用水槽の前で渓流魚の美しさを語る中村智幸さん＝栃木県日光市

## 天然の魚を守りたい

「フライの雑誌社新書」などの本を執筆。各地で講演し、養殖した渓流魚を地域性を考えないで大量放流することは、それぞれの川で遺伝的な特性を持って続いてきた同種の魚を消してしまおうと訴える。「その川にすむ天然魚を守り、魅力ある釣り場を整えることが地域の漁業協同組合の経営を安定させ、川本来の姿を後世に残せ

る」。語り口は熱っぽい。赤穂小3年のころ。学校脇の鼠川を橋から見下ろすと、寄り添うように泳ぐ2匹のアマゴのうち、1匹が体を横に倒し、体をくねらせて川底を掘ってはくほみを作る産卵の行動を繰り返していた。「アマゴの動きとキラキラと光る腹。なんてきれいなんだろう」と目を奪われた。これを機に2人の兄と渓流釣

りを開始。最初のアマゴを釣り上げるまで2年かかったが「釣れなくても川に通うのは楽しかった。澄んだ水や木々の間を流れる空気。山に囲まれた中で岩に腰を下ろし、母が作ったおにぎりを食べるだけで満たされる空間だったから」。伊那北高校に入学後も「大好きな釣りのため」などと学校に申し出てバイクの免許を取り、週末を市内の

思い切った文系から理系へと進路を切り替え、1年の浪人を経て東京水産大学(現・東京海洋大学)から同大学院へ。真剣に選んだ道を、自信を持って進む。後輩たちにも「高校の3年間で生涯続けたいものを見つけたい」と期待を掛けている。

自然環境を生かして魚の産卵場をつくる「自然繁殖」に一貫して取り組んできた。産卵場所となる水の深さや流れの速さ、川底の石の大きさなどのデータを積み重ね、分析結果を応用して川に産卵できる場所を再現した。流れがダムでせき止められているなど繁殖条件の悪い川でもいくつものペアが産卵し、子どもの育つ姿が確認できた。

現在、どのような種類の広葉樹がどの程度の間隔で川辺にあるかが渓流魚の生息に適しているのか、天竜川を訪ねて調査している。環境の大切さをテーマで裏付ける地道な作業が続く。

渓流で過ごした。

「漠然と」国語教員を目指していた3年の夏休み。進路変更を決めた。「一生打ち込んで続けたい仕事は何かってじっくり考えてみたんです」。その時浮かんだのが、渓流の魚の姿だった。



駒ヶ根市内から望む中央アルプスの白い峰。この山々から流れる川で渓流魚の魅力を実感した

「初めて釣ったアマゴの鮮やかな色は、養殖場のものではなかった。その川にすむアマゴやイワナはふるさとの一員。その固有種を守ってきたのは、やはり変わらない山や木や水だと思うんです」。この連休も、小さいころから眺めてきた中央アルプスのふもと川で釣りざおをのぼした。

(毎週日曜日に掲載します)